

略傳

(一)

綠雨齋齋藤賢君は、別號、正直正太夫
或は江東みどりともいふ。伊勢の人齋藤利光氏
(母は信子)の長男で、慶應二年十二月三十一
日伊勢の神戸で生れた。雙親に従つて上京し
たのは明治十年であつたといふ。父利光氏が藤
堂老侯の侍醫であつたので、一家は本所區綠
町三丁目の藤堂邸内に住した。綠雨君と竹馬
の友であつた文學博士上田萬年氏の記するこ
ろに據れば、綠雨君は、彌勒寺橋畔にあつた土
屋學校に入り、東洋小學に轉じ、更に又、同向
院裏の江東小學校に轉じたが、後一つ橋にあつ
た東京第一中學に入り、又直きに内幸町東
京府廳構内にあつた第二中學に轉じ、そこを
中途で退學してからは、本所にあつた明治義塾
に入つたが、半年も経ざるうち退學して、明治
法律學校(今の明治大學の前身)に移つて、法學
を學んだるも、業卒へずして、退いてしまつた
といふのである。

綠雨君から親しく聞いたところでは、家貧し
くして、二弟(讀、謙)に教育を興へるために、
自身は早く學を廢さなければならなかつたとい
ふのである。綠雨君には他に、姉さんと妹さ
んがあつた。

利光氏が其角堂永機と親交があつたので、綠
雨君もその宗匠のところへ遊びながら行つて、
俳句を學んだ。綠雨君自身は句作には深くは力
めなかつたのだが、遺つて居る君の句だけで見
ても、綠雨君の句作の才能決して侮りがたい
ものがある。

小學校での成績に就ても、
『讀書と數學は、いつも高點なりき。習字と
書學は、いつも落第點にちかかりき』
と、綠雨君自ら記してゐるだけあつて、少年の
友だちが集まつて作つた廻覽雜誌でも、綠雨
君の句や文が群を抜いて優れてゐたといふ。
假名垣魯文の門に入つたことに就ては、綠雨
君は次の如く記して居る。

『年十七八の比なれば、猶學校に通へりしと

覺ゆ。永機翁の紹介によりて、魯文翁に面
したり。胸牽錢に擬したる印一つ贈られし
を、用ひこそせざれ今も藏せり。いかなる
事を書きしか全く忘れられたど、携へ行き
しわが一文に名を眞猿と署し、芳譚と稱す
る雜誌に出されたり』
綠雨君の名の賢はまさると讀ませてゐたの
で、眞猿の號ができた譯であつたのであらう。

『假名垣派より出でたりとて、曩に或人のわ
れを太く貶しめしが、われはこの點に就て
争はずは、妨げじ。若然らば假名垣派の多く
は亡びたるに、われひとり存れるをせめて
は恃まんのみ。筆執る前に師ありや、後に
弟子ありや。今の人の師弟と稱するもの、
糊口の道を授けると授けらるゝとによりて
駭るゝ字也。われは戲作者の而流を以て
よし呼ばるゝととも、散髮頭の春水となり
て自ら喜ぶが如きことなかるべし。序な
れば記す』

今日では戲作者の時代は、最早歴史中のもの
として觀ることができるので、吾々も公平な感
を持ち得るのであるが、明治中期ぐらゐの時代
には新文學の徒は、やゝ自衛上の意味でも、戲
作者を蔑視しなければならなかつたのだ。

綠雨君は、新聞記者としての自身の閱歴を左の如く記して居る。

「誰々元校合方(係のこと)なりきと、よらでもあるべき人の垢を、よりく、噂の世に流れしが、われも最初新聞社に入る時は、やはり校合に従事したる身分なり。今日新聞といふに二度入りて、二度逐はれたり。自由の燈といふに入りしが、こゝには改革沙汰の起りて除かれたり。朝日新聞の東京に御まるにあたりて、少しは取立てられしも退きたり。東西新聞の倒れしより、大江氏の下に政論社に在りしが、江湖新聞の倒れしより、又も同社にもどりて、末廣氏(重忠)の大同新聞となる迄居續けぬ。されど他に合併の都合ありて、放たれたり。國會新聞、改進黨新聞は傍け者なればとて、逐はれたり。二六新聞に入り、時論日報に入りしも、われを迎ふるほどの社の、など倒れでは止むべき、共に法の如き最期を遂げぬ。逐はれしといひ、放たれしといふもの、皆わが罪なり、他人の罪にはあらず、決して他人の罪にはあらず。最早われは新聞社に所縁をもつまじきものに考へ定めて、長らく浪人修行に惜れたりしも、あらぬ望

のあゝさて凡夫なりけり再び動きそめて、萬朝報に入りしに、こゝはわれより浪社を申出でたるなれば、逐はれしにはあらざるべし。猶めざまし新聞、讀賣新聞にも寄書したる事ありて、いかにも波り者の將無き末とわれも思へど、假に一切を運といはゞ、運は菅の根の長きも一年を超えず、蘆の葉の短きは二月に足らざる程なれば、われの筆取りし時間を總計するに、まことに僅少なる事なりしなり。千露盤手にせぬ商人の扶持によりて、先づ年迄立ちしわが身をおもへば、變るにをかききは元來空蟬の人の志よな」

(二)

今日新聞の社長であつたといふ小西義敬氏は當時の所謂通人であつたので、綠雨君の世間知識は多く斯人に負ふところがあつたといふ。綠雨君から聞いたところでは、綠雨君自身何かの會社に使はれたことがあつたらしいのだから、それは小西氏の配下に於てではなかつたらうか。とにかく、小西氏などから金錢の使ひ方を教へられたことは確らしい。

綠雨君は元より當時の所謂小新聞の雜報記者

から身を起したと云つて宜しいのであるが、その時代の作物は大凡左の如くであつたといふ。

「名は元かり菰の分けもたゞきず、亂れし本末の間の隙、甚だあたられぬ字義のまゝを、今は一般に小説と呼べられたれど、以前はいづれの新聞社にても、單に續きものと稱へしなり。われの初めて之れに筆執りしは、明治十九年一月、住處にちなみて江東みどりと號し、善惡押繪獅子板といふを、今日新聞に出したるとき事なり。引つゞきて二三の新聞紙に雨夜の狐火、杜鵑里、初聲、比翼連鴛鴦毛皮、紅白梅、花叢、春寒雪解月などいふを出したるが、何れも所謂お伽草紙、七五づくめの極めて甘たるきものなりしは、已に命題に明かなるべし。はやく手元より取棄てたれば、書きし事柄の一部をさへ、われは全く記憶せざれど、むかしを言はゞ權の一本、面はのみちす可きに定まれるを、あれのこれのと洗ひ立てのうるさければ、自らこゝに名告り置くものなり。」

綠雨君作のこれ等の續き物は、無論後年の作とは比べものにはならぬのであらうが、それにしても、流石に綠雨君の筆になつたものだけあ

つて、文章には一種の風格があつて、當時の同種の作物のなかでは、異彩を放つてゐたと傳へられて居る。

明治二十二、三年頃、當時まだ文學者志望の青年であつた僕等が最初に綾雨君の作物に接したのは、綾雨君が正直正太夫の別號の下に書いてゐた『初學小説心得』小説評註問答評註讀明文學』といふが如き諷刺的批評の諸篇に於てであつたと思ふ。正直正太夫の戲號の由來は、綾雨君が伊勢の生れであつたからだと云へば、その上の説明には及ぶまい。

ところで、綾雨醒客の號の由つて來るところで、何うかといふと、

『二十二年三年頃たるべし。今おもへばいられぬ雅號も、見やう見真似にほしくなりて、友なる紫瀾子の紅露情神、綾雨醒客とかきて送られしに、前者は其ころ咲盛る文壇の花形ともいふべき作家の、頭字一つ宛寄せたるにひとしければ、避けて後者を採みしは、是亦住處に因みあればなり。綾雨は若葉のしづくを謂ふとぞ。』
紫瀾子は坂崎氏、土佐の人で、『汗血千里駒』といふ坂本龍馬のことを書いた小説などの作があつたと思ふ。

小説作家として綾雨君の名が當時の新聞で認められるやうになつたのは、二十四年に出た『油地獄』からであらう。『かくれんぼ』も殆ど同時の作であるが、此の方はそれ程世評に上ほらなかつた。綾雨君は後年隨筆『日用帳』のなかで、自分は『油地獄』より『かくれんぼ』の方が得意だと書いてゐる。

『油地獄』を言ふ者多く、かくれんぼを言ふ者少し。是れわれの小説に筆を着けんとおもひ、絶たんとおもひし雙方の始なり、終なり』

綾雨君の歿後、坪内大人は『かくれんぼ』に於ける綾雨君の描寫力を激賞せられた。『春水が何員をも費して拙いて居るところを、綾雨君は一二行で鮮やかに描いて居る』といふやうな言葉であつたと記憶する。

(三)

綾雨君が雙親を失つたのは、二十八年だといふのであるが、弟君と共に、下宿住ひを始めた。上田氏の記憶によれば、明治三十二年の春までに、綾雨君は左の如く轉宿してゐる。駒込蓬萊町の奥井、本郷弓町の高桑文學士高桑胸吉氏の家、淺草向柳原の中村氏方(こ

れは綾雨君の妹婿の家)、本郷丸山新町の某館、その前に千葉縣の市川に居たことは『ひかへ帳』のなかに書いてある。丸山新町の帳の上の宿に綾雨君が居た時分(明治三十年の十月頃)、僕は綾雨君を知つたのであつた。森川町の藤藤といふへ移つたのは、その翌三十一年であつて、その前後に萬朝報へ入つたのだと思ふ。その宿には故大野酒竹君が下宿してゐた。其所では、田岡龍雲、幸徳秋水、久津見麻村、井原青々園などの諸氏の顔を見かけたことがある。朝報紙上に書いてゐた隨筆の『眼前口頭』の

なかの婦人論の部分が筆禍にかゝつたので、黒岩涙香からの勸告で、綾雨君は退社した。三十二年の秋であつたかと思ふ。此の頃にはもう『太陽』へ綾雨君の『おぼえ帳』が出てゐたと思ふ。

鶴沼の東屋へ行つてゐたのは、その翌年であらう。それから、小田原へ移つたのは、三十四年になつて、同所の綾新道といふのへ卜居したといふ通知があつたが、その年の暮に中瀬谷の與謝野寛君のところへ、綾雨君と落ち合つた。綾雨君の次の弟さんの理學士讓氏が臺灣で病死したのは、三十三年五月であつたといふ。その後綾雨君は綾新道から十字町へ轉居し、三

十五年の秋東京へ出て来て、十二月淺草須賀町の明治病院の路次（おぢい）の或る家を借りて、少時住つてゐた。そこから、本郷の千駄木林町二百三十番地へ移つたのは、三十六年の五月一日であつた。同じ年の十月二十三日に本所横綱の二丁目七番地へ轉居した。誰にも知らさずに、隠棲してゆつくり療養がしたいから、誰にも云はずにゐてくれと、固く口止めをされたので、已むを得ず、人から聞かれても、黙つてゐた。

家は御藏橋より一町程手前のところを右に曲つた路次と云つていゝくらゐの狭い横町の中程の右側の三間程の平家であつた。何處かの隠居所の一部を仕切つたとかいふので、狭くはあつたが、そんなに汚い衰れな家ではなかつた。あのあたりは、先年の震災に一掃されてしまつたので、今日では、周圍がまるで變つてゐるであらう。

翌三十七年になると、綠雨君が痲痺（肺患）がだん／＼に重りだした。二月の或る日、何うも病氣がよくない云つて來たので、尋ねて行つて、養生費の工面に關する相談を受けて、僕の従兄の野崎左文に話して、盡力して貰ふことにしたが、綠雨君と考の相違ができて、十

分に盡し得なかつたのは残念であつた。綠雨君の末弟の小山田謙君は、軍醫で滿洲へ出征中であつた。

四月十一日の夕方であつたが、綠雨君の妹婿さんの中村氏が、僕がその時住まつてゐた麴町區飯田町五丁目の家へ尋ねて來て、綠雨君が危篤だから、來て遺言を聞いてくれといふのだ。直ぐ駆けつけると、綠雨君は氣分は確であつた。何時もと少しも變らぬ物靜な聲で、「いよいよ醫者から絶望だと宣告された。今夜もう一度注射を受けるが、その後は注射も利かなくなるといふんだ」といふ話をし、千駄木以來、出版の目的で綠雨君が一閱してくれることになつてゐた樋口一葉君の日記を、樋口家へ返してくれと云つて、家人に言ひつけて、文庫のなかから出させた。それから、

『僕が本月を以て日出度死去致候間
此段謹告仕候也、四月一日 綠雨齋
藤賢』

といふ死亡廣告の文案を、綠雨君の口授のまゝに書き取つた。『文筆の士に枕邊に居られるのは、何でもない唯の人間齋藤賢として死にたい自分の最期の心が、よりになつていけないから』と綠雨君がいふので、僕は直き引き取つて、綠

雨君の知人の主な人々へ、綠雨君危篤の通知を出した。翌十二日の午後四時頃、勤先からの歸途、見舞つたが、もう逢ふのも苦しいからといふ傳言であつたので、直ぐ歸つた。

十三日の午前十時過ぎに、野崎左文から、綠雨君死去の電話がかゝつた。それからは、與謝野、幸田、坂本（紅蓮河）、幸徳、野崎その他の人々と、綠雨君の家で落ち合つて、葬式の手傳ひをなし、遺言通り、翌早朝、三河島の火葬場へ遺骸を送つた。その途中で幸田君に戒名をつけることを頼むと、露伴君は、暫らく沈思の後で、「仄字ばかりにはなるが、春曉院綠雨齋客として、居士とも、信士とも附けずに置いたら何うだらうか」と云つた。火葬場の方で待つてゐた人々にも話して、戒名はそれにきめてしまつた。

越えて十六日、午後一時から、本郷東片町の大圓寺で、埋骨式といふ名義で、葬式を行つた。文壇知名の士は大抵會葬してくれた。幸田君は友人を代表し、與謝野君は新社を代表して、弔辭を讀んだ。大圓寺は齋藤家の菩提所である。家は綠雨君の遺言で、養子などをせず、絶家になつてしまつた。

綠雨君は、當時の文壇の何れにも屬さなかつ

た人である。當時の文壇の主流であつた硯友社の人々に對しては、全く反抗の態度を執つてゐた。しかし、何の作家に對しても、偏頗は無かつた。公けにした短評は皆痛烈、皮肉を極めたものであつたが、ことごとく十分の根據あるもので、決して漫罵ではなかつた。綠雨君の頭腦は極めて論理的に働き、しかもそれが驚くべく鋭敏であつた。それが聯想の上に働いた結果が、あの思ひつきの豊なパロディ(作り代)の作となり、戲評の妙文となつて現はれて居ると思ふ。

綠雨君の時代に於ては、言文一致がまだ搖籃時代であつて、作家は皆根本に於ては徳川時代の文脈を學ばなければならなかつた。綠雨君の優れたる記憶力はその方面に於て、驚くべく豊富に働いて居る。當時の所謂文章に於ては、語句の洗練には請ふべからざる勞作と苦心とを要したものであつた。綠雨君の小説はその種類の作物として最も顯著なる實例である。僕はそのなかでも最も代表的なものとして、斷片ではあるが『おぼろ夜』を選んだ。

綠雨君が文學者として發揮した技能は可なり多方面であつた。俳句、和歌、小唄に至るまで皆一家の風格を持つて居る。即ち、それ等の

一時の興にまかせたやうな作品にも、作家の特殊、個性が明確に印刻されて居る。本集には、綠雨君のあらゆる種類の作品を謂はば見本的に一わたり集めてみた。此の方が反つて斯の異彩ある作家の全豹を示すことができると思つたからである。

綠雨君の事に就ては、明治三十七年の五、六月頃の『明星』『新小説』『帝國文學』『内田魯庵君著』思ひ出す人々、及び拙著『孤蝶隨筆』等を参照あらんことを願ふ。

綠雨君の手紙は皆殆ど藝術品と云つて宜しいくらゐの美文なのだが、今日繪の分をその實例として左に活字に附して置く。

うもれ木の御返し迄にみだれ箱昨夜差出し申候
例の彌次馬歌三つ至急御點を得たく存候
これでも公刊物に掲ぐるつもりに候
(けふ御間に合はば明星にても)

笛の音のすみれの岡の薄月夜
誰が子籠を白き胸やる

啼けばこそ山時鳥名にもたて
京は青葉の用なきところ

なでしこのおもひの宿の雨の朝
赤きも枯れぬ白きも枯れぬ

御近況如何文藝界の寺岡村御待申居り候
貧いよく貧敵は中々勘辨せず着た切雀の
宿にのみとちこもりて茫然とくらし居り候
廿六日
綠雨

右は鐵幹大兄(與謝野寛氏)にあてたもので、
『近きところへ参り候ことゆゑ先日落合先生を
御たつね申候』と追て書きが誌されてゐる。

昭和四年二月三日
馬場 孤蝶